

# 勉強の見返り ではなく 学習の嬉しさを

国語教育講座・准教授

橋本 昭典



神戸開帝廟にてゼミ生と

## 言葉の来歴を知る

私は「漢文」と呼ばれる古代中国語で書かれた文献を日々読んでいます。漢文の最大の特徴は、三千年ほどの間ほとんど文体を変えることがなかったことです。ひとたび漢文読解力を身に付けたなら、『論語』から夏目漱石の漢詩まで読めてしまうのです。このことはまた、一言一句が数千年の歴史を担うという特質を生み出しました。私は今、十九世紀のある思想家の著作を翻訳していますが、時に一句を訳すのにまる一日かかることもあります。数千年の文章の中からその思想家が読んだに違いない幾冊もの書に当たって、ようやくその思想家がその一句を使用した意図を理解することができたのです。訳文にすればたった一句でも、それを理解するにはその何倍もある言葉の来歴を知らなければならぬのです。

## 「学習」と「勉強」

この二つの言葉にも来歴があります。

「学習」は『論語』の「学んで何度も復習すると、そのたびに理解の深まりや能力の向上が感じられて嬉しい」に由来します。一方の「勉強」は、中国では「無理をする」という意味（日本でも「勉強しまっせ」と言う時はこの意味）で使われ、日本語で言うような「学ぶこと」の意味はありません。

本来、学ぶことは、孔子も言うように、「上達」の感得が嬉しいということに根を置いたものでした。それが日本では「学ぶこと」とは無縁な「勉強（無理をする）」という言葉にその意味が加えられたのです。ちなみに「勉学」という言葉も中国語にはありません。どうやら日本では学ぶことは無理をすることと相性が良いようです。しかし、無理をするだけでは学ぶことに見返りを求めず、「勉強して何の役に立つの？」という問いが生まれてきます。そうではなく、私のゼミでは、上達することに嬉しさを感ずるその感性を養うことを何より大切にしています。

# キノコを通して 森を見よう

理科教育講座・准教授

菊地 淳一

## 未知の学問

キノコというと、昔はカムイ伝などの忍者マンガのイメージが強く、暗くてじとつと湿った所にいつの間にか生えては消えていく、世の中の日陰者という感じがありました。最近ではドコモダケやホクトのキノコの歌など、少しイメージが明るくなったかな？

20年程前、野外のキノコの研究を始めた時、そこらへんのキノコの多くに名前がないことに驚きました。自然界には150万種以上のキノコやカビがいると推定されていますが、名前がついているのは1割以下です。本など読んで知識が増えてくると森のことも生物のことも分かったかの様な気になります。でも、理科（自然科学）というのとは分かっていないことの方がずーっと、ずーっと多い学問だと思えます。



おいしいタマゴタケ（春日山）

## 共生

キノコは「木の子」ですが、実はキノコが無くては「親」にあたる木は正常に成育できません。多くのキノコは菌根菌といって木の根と共生して木の成長を助けています。秋の食卓を飾る（といっても我が家のことではないですが）マツタケも松の木と共生していて、松の成長を助けています。キノコがなければ成育できない樹木も多く、熱帯雨林の巨大な木の成長を制御している根系の調査や共生菌の研究なども行っています。



ラワンの大木の根の調査（インドネシア、スマトラ島）

## 分からない楽しさ

ゼミの学生さんはキノコのことなど全く知らずに入ってきます。勉強するには英語の論文を読むしかなく、調査をすればキノコの多くは名前をつけるのも難しいという分野で、新しい知見を得るためにどのような努力が必要か、また自分が何かを理解するという事はどのような事を考えて欲しいと思います。卒業して教師になられた方もいますが、教科書に書いてある知識をただ教えるのではなく、その後ろにある膨大な知識、さらにその後ろにある未知の自然の大きさを理解して楽しんでくれたらいいな、と思っています。やっぱり、分からないことの方が楽しいと思いませんか？

# 私の「これまで」と「これから」

教育実践開発講座・教授  
安藤 輝次

## ■学校で生まれたポートフォリオ

ちょうど10年前、現職院生が2回生となり、勤務校に戻って「体験学習の教育的効果」を実践的に検証しようという時、アメリカの実践をヒントにして取り組んだのが私のポートフォリオ研究の始まりです。

それ以来、学校実践で得た証拠を紡ぎながらポートフォリオの理論化に努め、総合的な学習や教科の発展的な学習における評価と学びの連動の考え方に帰着しました。このように私の研究は、学校の先生方が日ごろ悩んでいる問題に触発され、その問題解決に係わる過程から生まれたのです。

さて、ここで問題！



学校ケース・メソッドの教員研修

ポートフォリオは、次のどれにたとえられるでしょうか？

- ① ビデオ
- ② アルバム
- ③ 灯台
- ④ ファイル

ポートフォリオは、①のように言語的学びだけでなくデジタルや作品などの学びも含め、②のように時系列に並べて評価し、③のように学ぶ方向を指し示すものです。詳しくはホームページをご覧ください。

〈ホームページ〉

<http://maistranara.edu.ac.jp/~andou/portfolio/del.htm>

## ■事例法からケース・メソッドへ

看護師さんを集めて職場の事例を討論するが、結論はオープンエンドで各自に任される。私が学生時代に恩師から紹介された事例法はこのようなもので、学校に導入するには「先生が明確な答えを求めるので、難しい」ということでした。

それから30年余り。学校は、決められた方法を機械的に適用するのでは今日の複雑な問題には対処できなくなり、事例法——英語で言えばケース・メソッドが教育界でも注目されるようになりました。写真は、小学校の先生方を対象にケース・メソッドを実施した時のものですが、この方法を使えば、教師一人ひとりが自立的に職務を遂行し、他人と繋がり、協働的に学ぶ力がつきます。これからは、学校の先生だけでなく教育実習終了後の学生さんにもケース・メソッドが必要な時代が来るように思います。

# 教師の支援を 中心に

学術情報研究センター・准教授  
伊藤 剛和

## ■ほしいものは作る

私の専門分野は、「教育工学」です。主に学校現場の先生方の悩みを伺い、一緒に解決していくために教育方法を考えたり、学習環境を整備したりすることを中心に活動してきました。

この分野に出会ったころは、コンピュータを授業の中に取り入れることが盛んでしたが、学校現場にある多くのコンピュータにはBASICというプログラミング言語しかないような時代でした。そんな環境の中、遠隔共同学習を実践して頂くため、子どもたちが考えたことを絵や文字で表現することができるソフトウェアを作製しました（「えほん」とか「かわらVAN」などという名前をつけて頂いていました）。酸性雨の共同観測の実践などで活用して頂きました。

また、汎用機という大学ぐらいにかか無いような小型計算機の中に、今という電子メールや電子掲示板のような仕組みを作ったりもしていました。大学の授業の環境であったり、遠隔にいる現場の先生への遠隔教育のための場の提供でした。



校内ネットワークの利用説明会で

当時は、このように「欲しいものは、作る」が当たり前でした。今でも「自習を支援するための個別学習支援システムの開発」など、自分自身で開発しているものもありますが、最近ではデジタルカメラや携帯電話、PDAといった様々な情報メディアが高機能化し普及してきていますので、「既にあるものをうまく組み合わせる活用方法を考える」とか、そういうシステム類をうまく運用するための手法や人材養成なども手がけています。

## ■情報教育

もう一方、「情報教育」という領域も専門にしています。特に最近では、社会的にも注目されつつある情報モラルや情報安全教育といった分野にも挑戦しています。教科指導とは違う教育方法が求められる領域ですので、どうしていくと良いのか日々悩みながら活動しています。まだまだ若輩者ですが、教育大学の1員として学校現場と共に活動していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひ致します。